ねじ式

上野昂志の朝焼け映画館③映画『ねじ式』公開記念特別編

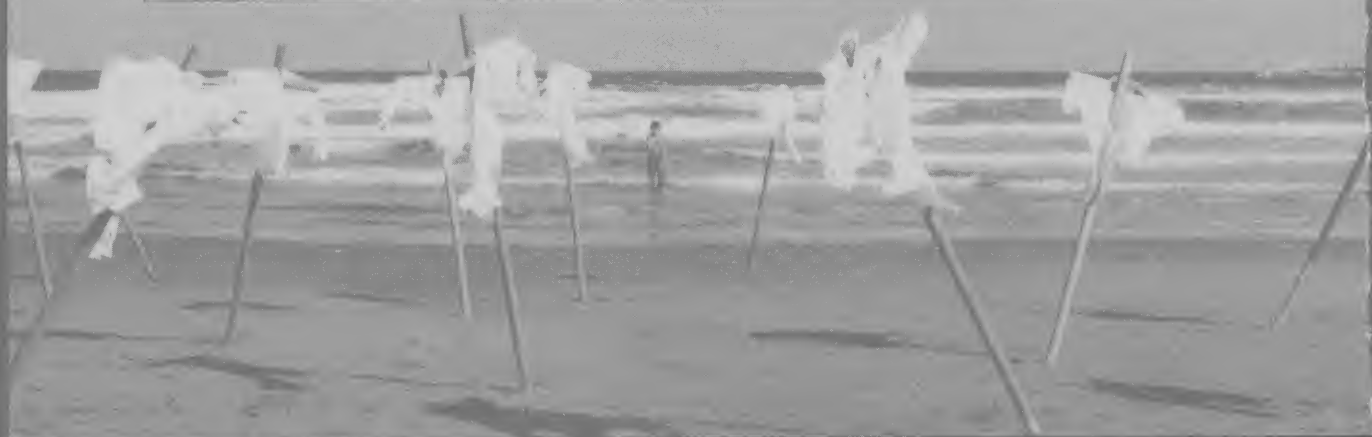
『ねじ式』は、石井輝男の活動屋魂が発露した若々しい作品だ！

まず冒頭の、タイトルバックに延々と繰り広げられる女体の乱舞に驚かされる。地を這うように蠢く女体と、喘ぎにも似た声が、一挙にこちらを包み込んで、いったい、これは何か?、何が始まろうとしているのか、という眩暈にも似た思いに襲われるのだ。と同時に、いきなり皮膚の裏側をくすぐられたような奇妙な感覚を覚え、無性に笑いたくなる。

まったく、石井輝男という監督にはいつも驚かされる。わたしのように三〇年以上前から石井監督作品に親しんできて、しかも、石井監督とつげ義春との結びつきの成果としては、すでに五年前の『ゲンセンカン主人』を見ているから、この『ねじ式』についてもそれなりのイメージを持ってスクリーンに相対したはずの者にしてさえ、やはり、これには驚かされる。まさか、こんなふうに始まるとは思わなかった、と。

もちろん、見終わってから振り返ったときには、アスベスト館の女性舞踏家たちによる女体の乱舞が、冒頭と末尾にあることは、十分納得できる。いわばそれは、作品として表に現れたつげ義春の世界を支える下意識のようなものとして、アモルフに蠢いているエロスを形象化したと解釈できるからである。だが、実際の画面は常に解釈に先立ってこちらの目をうつ。そのことに端的に驚かされるのだ。と同時に、そこには深刻な解釈では到底そうはならないような、石井輝男独特の稚気といったものが感じられて笑えるのである。これは貴重である。石井輝男は若いのだ。いや、どんどん若返っているというべきかもしれない。その若さが、フィルムに生気を与え、輝かしている。

それがもっともよく現れているのが、オムニバス形式（と、一応いっておく）で綴られる話の最後に現れる「ねじ式」であろう。あの海、あの汽車、あの町、そして金太郎飴のおばあさんのビルとその上の産婦人科の医者の部屋。いまの映画界の常識でいえば（とはいえ、むろん予算の問題はあるが）、あそこはCGを使って撮るところだろう。しかし、石井輝男は、そこを文字通り手作りのローテクでやっている。その手作りの、バレバレのチャチさが、なんともいいのだ。それは、たんにそのほうが味が出ていていい、などということではない。むろん、味もあるし、またそのほうが原作の漫画の感触に近いということもあるが、ここでいいたいのは、そのことではない。現場での思いつきを含めて、手持ちの材料を工夫してやって、たとえ失敗してもそれでよしとという、強い肯定の姿勢が、まさに映画的な若さとして画面を活気づけているのである。それは生粋の撮影所育ちの監督として、夥しい数のプログラムピクチュアを作り続けてきて、しかも決して大家ふうに構えることとない石井輝男という監督の、活動屋魂の発露といってもいいだろう。

そして、それに応えるように、ここでは、家主の丹波哲郎や、金太郎飴を売るおばあさんの清川虹子といった超ベテランの俳優たちが見事に若返っているのだ。とりわけ清川虹子は、浅野忠信のツベが、「もしかしたら、あなたは、ぼくのおっ母さんではないですか」

ねじ式

というのに答えるとき、ふっと頬を赤らめるようにして涙を流すところなど、艶めいた若々しさを感じさせて絶品である。ベテランといえば、わたしの大好きな砂塚秀夫が出ていたのが嬉しかったが、欲をいえば、もう少し出ていてほしかった。

むろん、これに対する若手もみんな頑張っているのだが、なかでも石井作品ではお馴染みの金山一彦が、いつもとは違ったオカマふうのイメージを出しているのがおかしかったのと、もっきり屋の少女になるつぐみの目の強い輝きが印象的だった。だが、やはり特筆すべきは浅野忠信であろう。

あの、常に一歩引いたような独特の風格。本当に浅野忠信というのは不思議な役者だと思うのだが、いつも画面の奥から独特のアウラを発散している。通常のスターの場合は、画面の前面に出てきてその存在を主張するのだが、浅野忠信はそうではない。いつでも、一歩引いた感じがあるのだ。カメラに対するときの実際のポジションは、むろん監督が指示しているのだろうから、具体的なレベルで彼が引いた位置に立っているということはないだろう。にもかかわらず、見たときの印象として、一歩引いた感じがある。それでいて、空気の波動のように、彼の存在の気が漂ってくるというのは生半可なパワーではないし、そこに浅野忠信という役者の独特の新しさがあるのだと思う。それが、つげ漫画における、つげ義春の分身としての主人公兼話者という存在に得難い生命を与えているのだ。

さて、ここまできたところで考えるべきは、やはりつげ義春の漫画と石井輝男の映画との関係であろう。より具体的には、漫画のコマで囲まれた絵と映画の画面の関係である。これは『ゲンセンカン主人』がすでにそうだったが、石井輝男は、つげ義春の絵と同じカットを撮るし、登場人物のセリフも、ほとんど原作に手を加えることなく、そのまま使っている。そして、それについて石井監督は、ぼくのつげさんへのオマージュ、というい方をしてもいる。おそらく、石井監督の気持としてはその通りなのだろうが、それでこの問題が片づくわけではない。漫画と映画とでは、もともと違うものだからである。たとえば、下手に漫画のコマをなぞって撮ったら、絵を実物に置き換えただけのひどく味気ないものになる危険があるからだ。つまり、平面に描かれてこそ生きる人物なり背景なりが、立体になったがゆえに原作の持つ味わいを失ってしまうということがいくらでもある。

ところが、ここでは、そうなっていないばかりか、見事に映画になっているのである。つまり、一方では、まさにつげ義春の漫画そのものでありながら、他方では、同時に石井輝男の映画になっているのだ。いわば映画は、漫画を作り替えるのではなく、それをそっくり模倣しながら映画に立ち返っているのである。これは決して簡単なことではない。その秘訣はどこにあるのか。つげ義春の描く漫画が実は映画だったという乱暴な仮説がチラつかないこともないが、いまだ、的確な答えは見つかっていない。もう一度『ねじ式』を見ながら考えることにしよう。

写真●斎藤宣彦

つげ義春作品をシリーズでTVドラマ化。テレビ東京7月13日スタート。

俳優・豊川悦司がドラマ監督デビュー!!

テレビ東京新番組 つげ義春ワールド

↑今回、初演出を手がける豊川悦司(『退屈な部屋』より)

映画『ねじ式』の劇場公開とタイミングを同じくして、この夏、TVでも、つげ義春作品がオンエアーされる。番組名もズバリ、『つげ義春ワールド』。7月13日(月)深夜12:45〜1:15。全12回。テレビ東京にてオンエアースタート。

今回、TV化される原作は9作品。30分で1作品を放送。原作によっては前後編にまたがる場合もある。

記念すべき第1回の放送(7月13日)は『退屈な部屋』。監督を務めるのは、これがドラマ監督デビューの俳優・豊川悦司。主演には、これまた監督・橋口亮輔を起用。妻役に鈴木砂羽。物語は、私(橋口)が妻(鈴木)に内緒で部屋を借りた。そこで仕事をするわけでもなく、浮気をするわけでもなく、ただゴロンとしているために借りたのだった。しかしある日、妻がやってきて…。

続いて第2回目の放送(7月20日)は『懐かしいひと』。監督は同じく豊川悦司。出演は橋口亮輔、鈴木砂羽。

監督・豊川悦司が、つげ義春の原作をどう演出するか楽しみです。橋口亮輔の役者としての演技にも注目。

↑『退屈な部屋』の夫役の橋口亮輔

↑『退屈な部屋』の妻役の鈴木砂羽

↑『懐かしい人』より、鈴木砂羽と橋口亮輔

↑鈴木砂羽と台本をチェックする豊川悦司

通りすがりの男（哀川翔）に説明する助川

河川敷きに石のお店を開く助川助三（北見敏之）

そして第3回（7月27日）第4回（8月3日）の放送は、以前映画化もされた『無能の人』を前・後編で放送。監督は望月六郎（93年『極道記者』、95年『新・悲しきヒットマン』、96年『鬼火』等）。出演は、主人公の助川助三役に、北見敏之。妻・恵子役に水木薫。他に、哀川翔、山村美智子、三橋貴志、稲尾豊樹、さいとうさくら、松山健二（子役）らが出演。脚本は高見亮子。

売れない漫画家の助川助三（北見）は河原の膨大な石を見ながら、これが金にできれば…と思いたつ。石収集マニアが存在し、オークションも開かれ高値で売買されていることを知る。そこで、石を採集、河原で石を売る店を始めるのだが…。

今回の新番組で取り上げられている原作は割と近作が多い。以降も、『別離』（前後編）、『ある無名作家』『義男の青春』（前後編）、などのタイトルが予定されている。月曜日の深夜は今から要チェック。

石の雑誌を手にした助川

石のオークションを取り仕切る石山（稲尾豊樹）

売れなかった石をもちかえる助川一家

多摩川の河川敷きにて。左から恵子（水木薫）、三助（松山健二）、助三（北見敏之）、ケー（さいとうさくら）、テツ（三橋貴志）